

悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子



イラスト／清水直子

第9回

「いつでも来ては、良い治療？」

❁ 喘息は「発作を起さない」をめざせる

30年以上も前のテレビ番組を見せ
ていただいたことがあります。国立
病院で喘息治療に取り組む青年医師
を紹介した番組なのですが、その中
に長期入院し病院で生活しながら治
療している何十人もの子どもたちが
映し出されていました。その子ども
たちが体を鍛えるために走っている
姿は、さながら運動会のようでした。

かつて青年医師だったその専門医
に聞くと、今では喘息治療で入院す
る子どもはほとんどいないそうです。
先生たちが使う「小児気管支喘息治
療・管理ガイドライン」という、標
準的な治療を示した文書には、治療
目標について、はっきりと「スポー

ツも含め日常生活を普通にこなすこ
とができる」「昼夜を通して症状が
ない」「学校を欠席しない」と書か
れています。適切な医療のもとでは
大半の子どもたちでそれが可能にな
ったということです。

「かつての青年医師」は、「母の会」
の講演会でその理由を分かりやすく
説明してくれました。喘息は以前、
発作がない時に気管支は正常で発作
の時だけ気道が狭くなって苦しくな
る、発作が治まれば気道は元に戻る
と考えられていた。ところが病態の
説明が進むと、実際にはそうではな
くて、発作がない時も気道の粘膜に
アレルギー性の炎症を起こしている
ことが分かってきた。従って治療も、
発作を止める治療から、発作を起こ
さないように、普段から気管支の炎



そのべ・まりこ●神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。

症をなくして予防する治療に変わっ
たということでした。

❁ わが子の治療を
見直してみても

そのことを親の立場で考えれば、
わが子は治療しているけれども、し
ばしば発作を起こす、運動会に出ら
れない、秋になると発作を起こして
入院するなどという状態は、治療が
十分でないことを表しています。

「母の会」は、子どもの喘息発作の
ために、夜間救急外来で顔を合わせ
て親しくなったお母さん10人で発足
しました。当時は「発作が起きたら
いつでも来ていいよ」と言ってくれ
る医師がありがたかったのですが、
今では、必ずしもそれが良いことと
は言えないことを知りました。